

名古屋大学高大接続研究センター「レクチャーシリーズ」

高大接続を目指す「キャリア教育」

—「ボランティア」から「サービス・ラーニング」
そして「インターンシップ」へ—

今津 孝次郎

愛知東邦大学教授 ・名古屋大学名誉教授

(教育社会学・学校臨床社会学・発達社会学)

1. 「キャリア」と「キャリア教育」の意味

(1) Careerの語義：ラテン語carraria(=車道)に由来し、競争するための道、の意から多様な用法が派生した。今でもcareer about(=全速力で走りまわる)のように使われる。

〔A 広義〕人生、経歴、履歴

〔B 狭義〕職業、専門職

〔C 最狭義〕成功、出世、職階上位

(2) キャリア教育の二つの意味

- ① 主に〔A 広義〕に基づき、人生のさまざまな生き方を知り、自分の将来展望を描きながら検討する。
- ② 主に〔B 狭義〕に基づき、さまざまな職業について知り、自分の将来の職業選択を描きながら検討する。

以上二つの意味のうち、ほとんど②の意味で使われている。

ただし、①②のいずれであれ、「個人の歩み」に着目しがちで、個人を取り巻く集団・組織の視点から「社会の一員となるプロセス」は見落としがちである。

2. 社会の一員となるプロセス

- (1) 青少年の社会性の発達：人間の共同生活を理解し、そこに「参加」できる態度と諸能力を学習すること。この学習を積み重ねることによって、社会の一員となる準備が整う。職業選択もその一環。
- (2) 参加の意味：「参加」とは、集団や組織の諸活動に積極的に関わって、個人の意志を反映させ、連帯を達成するとともに、集団や組織に貢献すること。
- (3) 「参加」の諸段階：「自発性」の低次から高次へ
- ①所属：集団・組織のメンバーとして単に「いる」状態
 - ②帰属：「自分のもの」として意識している状態
 - ③活動：役割を遂行し、一員として何かを「おこなう」状態
 - ④社会場面への関与：集団・組織内に止まらず、広く社会状況に目を向けて、「社会に関わる」状態

3. ボランティアの意味と意義

(1) Volunteerの語義：本来は「**自発的志願**」の意で、有償・無償を問わない。したがって、犠牲的奉仕精神をもった慈善活動という、これまでのイメージは特殊で偏ったもの。

(2) ボランティアの性質：

- ① 高次「自発性」による「参加」レベル④「**社会場面への関与**」の**具体的行動**に当たる。青少年にとって「社会の一員となる」プロセスで重要であり、「**市民性**」教育の基礎ともなるので、最初はやや強制的な機会提供が求められることもある。建国の歴史的背景からボランティアが根付いたはずのアメリカでも、近年は青少年のボランティア活動が低下していることから、高校教育に必要な「**ボランティア時間**」が1980年代にあえて提起されたことがあった。
- ② 福祉分野に限らず、特別の能力が無くても、**あらゆる生活分野**で可能。
- ③ 単なる行政の手伝いではなく、**地域の共同生活を自ら創り出す**積極的行動。

4. 青年前期から青年後期への発達的变化

児童期 → 青年前期 → 青年後期 → 成人期

～10歳頃～

小学校

～18歳頃～

中・高校

～25歳頃～

大学・専門学校

就職・結婚

- ・身体の成熟と心身発達不調和そして調和的発達へ
- ・自我の芽生え
- ・親(保護者)への依存から徐々に脱却、同輩関係
- ・家族内世界から学校世界そして社会へ視野の広がり
 - ・高校格差による進学展望の明確化

● 「高大接続」とは「青年期」の統一的把握

● 「キャリア教育」の課題としては、〔B狭義〕「職業、専門職」に依拠して高校での職場体験学習から職業選択模索を急ぐよりも、〔A広義〕「人生、経歴、履歴」に依拠して、「参加」の広がり(社会性の成長)を目指し、高校での幅広いボランティア活動がより重要

5. 大学初年次の「サービス・ラーニング」

(1)「サービス・ラーニング」の意味

地域諸機関での奉仕活動(サービス)を通じての経験学習(ラーニング)。1990年代後半からアメリカの市民性(citizenship)教育として中等・高等教育で盛んになってきた実践活動。日本でも少しずつ広がりつつある用語。

(2)「サービス・ラーニング」の意義

「ボランティア」は自発的奉仕活動の意で、幅広い分野での「参加」そのものであるが、学習的意味合いが弱い。また、「インターンシップ」は具体的な就業経験の意で、特定分野での職業訓練に限られる。「サービス・ラーニング」は両者の中間に位置づく。

〔教員養成の分野〕

2020年からスタートする新教職課程では「学校インターンシップ」が登場するが、大学1~4年全学年を対象にするには、4年間の学生の成長発達プロセスを見落とした乱雑な用法なので、初年次は「サービス・ラーニング」として位置づけるべき。

(3) 愛知東邦大学教育学部 1年生「サービス・ラーニング」の試み ー教育学部スタート(2014年度)の柱「サービス・ラーニング」開始の背景

- ・**大学内**: 座学が苦手な学生が多い。学習への動機づけが不可欠。身体を動かす活動は好む。若者一般に共通する特質として、少子化のなかで子どもとの触れ合いの機会が少なくなっている。豊かで便利な暮らしのなかで、生活力に欠けるケースが目立つ。
- ・**大学外(地域の現場)**: 「子ども・教師・保護者のありのままの姿を知ってほしい、学校行事に人手が足りない」(近隣小学校長の“叫び”)
- ・**教員養成**に絞り、「学習」面を強調する意味で、一般的な用語「学校ボランティア」に代えて「サービス・ラーニング」と表現 → 小学校だけでなく、幼稚園・保育所・児童館などへ広がる。



- ・2年間の実験を経て、2016年度より**授業化**「サービス・ラーニング実習」(選択科目、前・後期各1単位、**プレ教育実習**の意義ー勸奨科目)
- ・サービス・ラーニング経験の結果、教職志望が強化されるケースがあれば、志望が動揺、あるいは弱体化するケースも→早期に進路変更の決断(**スクリーニング**)

(4) 新入学後約2ヶ月後に近隣小学校で春の運動会のお手伝い(事例)

＜用具係り＞



＜競技入場前の子どもたちと共に＞



＜運動会参加前＞

小学校の運動会は6年間経験あるからよく分かっている

＜運動会参加後＞

よく分かっているはずだったが、実は何も知らなかった(笑)舞台裏で先生方がどれだけ苦労されていたか！

「指導される子ども」から「指導する教師」への意識転換の始まり

6. インターンシップ

(1) キャリア教育における「インターンシップ」の位置づけ

インターンシップは特定職業の就業体験。進路選択がおおよそ決まった時期に、その職業に一定期間、実際に従事して実務を経験することで、就職の直前準備をするのが本来の姿で、**キャリア教育の最終段階**である。指導される事項も実務の具体的な内容に関わり、進路選択の意志を再確認することとも重なる。

(2) 高校生インターンシップの問題点

インターンシップは大学生の就活時におこなわれてきたが、近年は高校生のあいだでもしばしば見られるようになった。ただし、**いくつかの問題点**を指摘できる。

①キャリア教育の一環として、その目的が〔A 広義〕「人生、経歴、履歴」に関する具体的経験学習なのか、〔B 狭義〕「職業、専門職」に関する具体的経験学習なのか曖昧である。

②換言すると、広く社会と関わる一歩としての「職場訪問」なのか、「特定職業の実務体験」なのか、目的が不明確である。

③生徒個人のキャリア発達段階を無視したまま、人手不足で早く若者を囲い込みたい企業の思惑に流されてしまうかのように実施されていないか。

④職業選択で一定の結論を出すことを、インターンシップ参加によって急ぐことになっていないか。青年期の職業選択は、あれこれと揺れ動くのが普通である。

7. 大学4年間の成長発達に即した「参加」経験学習 (教員養成の場合)

(1) 青年期のキャリア発達を促す機会

〔高校〕 ボランティア

〔大学1・2年〕 サービス・ラーニング

〔大学3・4年〕 教育実習

〔大学4年〕 学校インターンシップ

社会との関わり

職業現場との関わり

＜職業選択の模索＞

特定職業の予備的就業経験

特定職業の直前就業経験

(2) 高校時の“あこがれ”や“夢”と職業の現実との乖離

高校時に職場訪問に行ったときや、幼い頃から接した指導者のイメージなどから、幼稚園や小学校の先生になりたいという“あこがれ”や“夢”を抱いて教育学部に入学する学生がかなりいる。しかし、教職の実際をまだ知らないために、現実を即して職業志望を立て直す必要に迫られるケースがある。「サービス・ラーニング」や「教育実習」そして「学校インターンシップ」はその立て直しのてこになる大切な機会となる。

8. キャリア教育にとって高大接続の課題

- ①同じ「青年期」でありながら「前期」と「後期」が中高と大学という学校制度によって区分されてしまっているので、**学生個人の発達過程**に即して連続して捉える必要がある。
- ②「青年(前+後)期」の発達的特徴に即しながら、「**社会参加**」の目標に向かって、各人に適切な形態を提供するのがキャリア教育の目的と考える。
- ③早期から〔B 狭義〕「職業、専門職」にとらわれることなく、常に〔A 広義〕「人生、経歴、履歴」と対話しながら探究する。
- ④高校時の「**ボランティア**」から、大学初年次の「**サービス・ラーニング**」へと連続させるプログラムの開発が求められる。
- ⑤①～③のねらいに基づき、④のプログラム開発を実現するために、**高校と大学の教員が共同研究プロジェクト**を立ち上げ、研究会で検討することを提案したい。

ご静聴ありがとうございました